ダニエル11章 Part1

「北の王」と「南の王」

11章は長いので、Part1～Part3 に分けて掲載します。

ダニエル11章のポイント

（1）この11章は未来の出来事に関して、旧約聖書中最も詳細な描写があるということ。

（2）11章は最も解釈の分かれる難解な章であること、があげられます。解釈のガイドラインとしては、三つあります。

三つの解釈のガイドライン　その1

①ダニエル書の預言は、終わりの時と御国の樹立で終わっていると言えると思います。2章、7章、8章9章もそうでした。ということで、この11章もそのように終わるのだろうか、考えられるかもしれませんが、11章40節から12章のはじめを読みますと、「あなたの民は・・・・皆救われます」とそういったお約束で終わっています。解釈の指針としてこれがまず一つ目です。

②解釈の手がかりの2番目は、2、7、8～9、11章と、全部反復と拡大の原則に従っています。同じことを繰り返しているようでいて、最後の部分がくわしくなっている、ということが言えるでしょう。

三つの解釈のガイドライン　その2

（②からの続き）そのように考えますと、この11章に関するかつての解釈のある部分が、今は支持されなくなってきている理由がわかります。たとえば11章の最後のあたりをしばしば、**特にユライヤ・スミス**などが主張したわけですが、**フランス革命にあてはめたり、トルコにあてはめたり**します。今はそれはほとんど支持されていません。というのは、たまたまその当時の歴史状況などが預言とよく合うように思われたためにあてはめたわけですが、しかしこれまでどこにも、フランスも出てこなければ、トルコもでてきていません。**なぜここで突然でてくるのか、ということになります。反復と拡大の原則**から言って、**最初から少し触れてあってこそそれがくわしくなるのはわかりますが、何もなかったのが急に出てくることは、預言解釈の原則からはあまり妥当ではないのです。反復と拡大の原則ーこれが解釈の手がかりの2番目です。**

三つの解釈のガイドライン　その3

③三つ目は、この11章のテーマは、最後の時代の神の民である、ということです。それは10章の14節にある通りです。11章には、いろんな人物が登場し、いろんな争い、戦いが描かれていますが、しかし神の民がテーマです。たとえば32節「自分の神を知る民」とか、「民のうちの賢い人々」（33節）とか、ちゃんと出てきています。そして12章にも、「あなたの民」あるいは「賢い者」「多くの人を義に導く者」といった言葉があります。ですから、「北の王」とか「南の王」のことばかり気にする向きがよくありますが、しかし一番の中心は神の民、それも**最後の時代の神の民であるのです。そこをしっかり押さえない解釈は、あまり適切とは言えないでしょう。**

これらの三つの点が、解釈の手がかりとして言えると思います。

注解 ダニエル書11章

ここの解釈は本当に難しくて注解者たちもあまり触れたがらない場合が多いです。それで、これだけは押さえておけば当面十分なのではないかと思われることだけを、ご紹介しておきたいと思います。ダニエル11章の語りは、ダニエル10：11の天使の言葉と考えられます。ダニエル10：19節から始まり、ダニエル12：4まで続いています。

1 わたしはまたメデアびとダリヨスの元年に立って彼を強め、彼を力づけたことがあります。
2 わたしは今あなたに真理を示そう。見よ、ペルシャになお三人の王が起るでしょう。その第四の者は、他のすべての者にまさって富み、その富によって強くなったとき、彼はすべてのものを動員して、ギリシヤの国を攻めます。

注解　1節～2節は、メディア・ペルシャの時代のことを意味しています。

1 わたしはまたメデアびとダリヨスの元年に立って彼を強め、彼を力づけたことがあります。
2 わたしは今あなたに真理を示そう。見よ、ペルシャになお三人の王が起るでしょう。その第四の者は、他のすべての者にまさって富み、その富によって強くなったとき、彼はすべてのものを動員して、ギリシヤの国を攻めます。

「ペルシャになお三人の王が起る」クロス大王に次いで王位についたカンピュセス（BC530-522）、偽スメルデス（BC522）、ダリウス1世（大王。BC522-486）の3人のことを指しています。

「第四の者は、・・・・ギリシヤの国を攻めます。」というのは、次のクセルクセス（1世。エステル記のアハシュエロス。前486-465年）が海陸の大群を用いてギリシャに遠征したことです。

注解　11：3-4　3節からはギリシャについて。

3 またひとりの勇ましい王が起り、大いなる権力をもって世を治め、その意のままに事をなすでしょう。
4 彼が強くなった時、その国は破られ、天の四方に分かたれます。それは彼の子孫に帰せず、また彼が治めたほどの権力もなく、彼の国は抜き取られて、これら以外の者どもに帰するでしょう。

「ひとりの勇ましい王」とは、アレクサンダー大王。

「彼が強くなった時、その国は破られ、天の四方に分かたれます。　彼の国が破れ4つの国ができる。これは前にも出てきました。その中でも特に二つの国が強くなりました。それは、シリア（セレウコス朝）とエジプト（プトレマイオス朝）です。この二つの強国間の争いの歴史を描いているのが5節から13節だと考えられています。

注解　11：5-13

5 南の王は強くなります。しかしその将軍のひとりが、彼にまさって強くなり、権力をふるいます。その権力は、大いなる権力です。
6 年を経て後、彼らは縁組をなし、南の王の娘が、北の王にきて、和親をはかります。しかしその女は、その腕の力を保つことができず、またその王も、その子も立つことができません。その女と、その従者と、その子およびその女を獲た者とは、わたされるでしょう。
7 そのころ、この女の根から、一つの芽が起って彼に代り、北の王の軍勢にむかってきて、その城に討ち入り、これを攻めて勝つでしょう。
8 彼はまた彼らの神々、鋳像および金銀の貴重な器物を、エジプトに携え去り、そして数年の間、北の王を討つことを控えます。
9 その後、北の王は、南の王の国に討ち入るが、自分の国に帰るでしょう。

注解　11：5-13 続き

10 その子らはまた憤激して、あまたの大軍を集め、進んで行って、みなぎりあふれ、通り過ぎるが、また行って、その城にまで攻め寄せるでしょう。
11 そこで南の王は、大いに怒り、出てきて北の王と戦います。彼は大軍を起すけれども、その軍は相手の手にわたされるでしょう。
12 彼がその軍を打ち破ったとき、その心は高ぶり、数万人を倒します。しかし、勝つことはありません。
13 それは北の王がまた初めよりも大いなる軍を起し、数年の後、大いなる軍勢と多くの軍需品とをもって、攻めて来るからです。

ここは、例のアンティオコス・エピファネスに至るまでの、セレウコス朝シリアとプトレマイオス朝エジプトのさまざまな動きを描いています。「南の王」はエジプト、「北の王」はシリアですが、ただ代名詞が入り組んでいるので、なかなか面倒です。

注解　11：5　（節ごと）

5節 南の王は強くなります。しかしその将軍のひとりが、彼にまさって強くなり、権力をふるいます。その権力は、大いなる権力です。

5節「南の王は強くなります」。エジプトを統治したプトレマイオスI世ソーテール（BC323-285年）。

「その将軍のひとり」とは、セレウコスI世にかトール（シリア王。BC305-280年）セレウコスはアレクサンダーの将軍の一人でしたが、もう一人の将軍に追われてエジプトに逃亡し、一時プトレマイオスの部下となっていました。

注解　11：6　節ごと

6節　年を経て後、彼らは縁組をなし、南の王の娘が、北の王にきて、和親をはかります。しかしその女は、その腕の力を保つことができず、またその王も、その子も立つことができません。その女と、その従者と、その子およびその女を獲た者とは、わたされるでしょう。

6節「彼らは縁組をなし」。セレウコス一世の孫アンティオコス2世と、プトレマイオス2世の娘ベレニケが結婚したことを指します。政略結婚です。その際、アンティオコス2世は前妻ラオディケを離別したのですが、2年後に復縁して逆にベレニケを離縁します。しかしラオディケは王もベレニケもその子も殺し、自分の子セレウコス2世を王位につけます。

注解　11：7-10　節ごと　続き

7節 そのころ、この女の根から、一つの芽が起って彼に代り、北の王の軍勢にむかってきて、その城に討ち入り、これを攻めて勝つでしょう。

「この女」。 ベレニケ。「一つの芽」ープトレマイオス3世。ベレニケの弟でエジプト王となってシリアに侵攻しラオディケを殺します。

10節 その子らはまた憤激して、あまたの大軍を集め、進んで行って、みなぎりあふれ、通り過ぎるが、また行って、その城にまで攻め寄せるでしょう。

「その子ら」北の王の子ら。セレウコス2世の二人の息子、セレウコス3世とアンティオコス3世（大王）。

注解　11：11　節ごと　続き

11節 そこで南の王は、大いに怒り、出てきて北の王と戦います。彼は大軍を起すけれども、その軍は相手の手にわたされるでしょう。

「南の王」　プトレマイオス4世。「北の王」「彼は大軍を起こす」。アンティオコス3世。両者はBC217年、ラフィアで戦い、アンティオコスの方が破れます。

12節 彼がその軍を打ち破ったとき、その心は高ぶり、数万人を倒します。しかし、勝つことはありません。

「彼」　プトレマイオス4世。

注解　問題は14節以降です。

14節からふた通りの解釈に分かれていきます。批評的立場の注解者たちはほとんど、ここからあともずっとシリアとエジプトの歴史が続く、特にその中心はアンティオコス4世エピファネスの詳細な描写であると見ます。保守はでもこの見方は強く、特に1-35節はアンティオコス・エピファネス、36節からは反キリスト、そしてアンティオコス・エピファネスは反キリストの型であると見なしたりするわけです。

ところが一方、私たちはどう見るか。メディア・ペルシャの後にギリシャ、となると、次に来るのはローマです。ここからが難しいのですが、

14節から35節ローマ帝国、少し重なって30節から39節は法王権、ととるわけです。そして40節以降は、よくわからないと。このように考えると、確かに今までの幻とも一貫してきます。

注解　問題は14節以降です。続き

このように、すでに14節から、解釈が分かれていきます。歴史的に見て確かにアンティオコスエピファネスにあてはまる描写が多いことも事実のようですが、しかしそれだけだとはとうてい考えられません。「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば」（マタイ24：15）というキリストのみ言葉は、明らかに、将来起きることを意味しています。ですから、この11章の預言は、単に紀元前2世紀の出来事（アンティオコス・エピファネスの所業）だけを指すのでなく、もっと広い意味を含んでいることは確かだと考えられます。

注解　14節以降　14節-15節

14節 そのころ多くの者が起って、南の王に敵します。またあなたの民のうちのあらくれ者が、みずから高ぶって事をなし、幻を成就しようとするが失敗するでしょう。

「あなたの民のうちのあらくれ者」　「あなたの民の中の」と読めば、これはユダヤ人の過激派を指しますし、「あなたの民に対する」と読めば、外から来てイスラエルの民を圧迫する敵、外敵、つまりローマをさすことになります。

15節 こうして北の王がきて、塁を築き、堅固な町を取るが、南の王の力は、これに立ち向かうことができず、またそのえり抜きの民も、これに立ち向かう力がありません。

「北の王」アンティオコス3世。「堅固な町を取る」。シリアがエジプトを攻撃し、シドンなどを攻略したこと。

注解　　14節以降　16節-17節

16節 これに攻めて来る者は、その心のままに事をなし、その前に立ち向かうことのできる者はなく、彼は麗しい地に立ち、その地は全く彼のために荒されます。

「 これに攻めて来る者」　ローマの本格的な登場です。特に16-19節はシーザー（カエサル）のことで、

17節　彼は全国の力をもって討ち入ろうと、その顔を向けるが、相手と仲直りをし、その娘を与えて、その国を取ろうとします。しかし、その事は成らず、また彼の利益にはならないでしょう。

「その娘」とは、エジプト・プトレマイオス王朝の最後の女王クレオパトラをさすと考えられています。他の注解者はこの部分を、前からの続きでアンティオコス3世のことを指すとしているようです。

～ダニエル書Part1終わり～

注解　14節以降　16節-17節

16節 これに攻めて来る者は、その心のままに事をなし、その前に立ち向かうことのできる者はなく、彼は麗しい地に立ち、その地は全く彼のために荒されます。

「これに攻めて来る者」　ローマの本格的な登場です。特に16-19節はシーザー（カエサル）のことで、

17節　彼は全国の力をもって討ち入ろうと、その顔を向けるが、相手と仲直りをし、その娘を与えて、その国を取ろうとします。しかし、その事は成らず、また彼の利益にはならないでしょう。

「その娘」とは、エジプト・プトレマイオス王朝の最後の女王クレオパトラをさすと考えられています。他の注解者はこの部分を、前からの続きでアンティオコス3世のことを指すととります。